



左側から法学部第二研究棟（5・6階部分）で屋上塔屋が見える。中央が法学部第一研究棟、右側9階建が文学部・教育学部共同研究棟。

（記念講堂から1992年5月9日午前6時撮影）

東北大学法学部同窓会

會報

第 19 号

発行所

東北大学法学部同窓会

発行日

平成4年6月30日

印刷所

今野出版企画株式会社



川内だより

会長 小山 貞 夫

この四月から学部長に就任することになりました。職務上同窓会会長をも兼ねることになっています。どうぞよろしく願います。

この三月末で、長年法学部のためにご尽力下さいました宮田光雄先生が、停年で退官されました。昭和三十年に入学した私は、若き日の先生の講義に多くを学ばせて頂いただけに、今昔の感を禁じえません。又外国人教師として五年間ドイツ法を講じて下さり、多くの学生に慕われ、スタッフの間でもすっかり仲間になりきって下さっていたカール・フリードリッヒ・レンツ講師が、マックス・プランク外国刑法・国際刑法研究所に移るべくドイツに戻られました。他方、この間に、比較外国憲法講座に蟻川恒正助教授と、アジア政治外交論担当の李鐘元助教授及び中国法制史担当の寺田浩明助教授とを迎えることができました。後者のお二人の人事は、共に専門の講座がまだないのですが、人を重視した柔軟な講座運用によるスタッフ充実策の結晶ですし、特に李助教授は、外国人籍の教授会構成員として初めての例ではないかと思えます。学部の教育・研究充実の努力の表れとして、ご注目下さい。

戦後最大の大学改革にもなりそうな教養部改革が計画されています。まだその全体の具体像を示すほど煮つまってはいませんが、教養部はなくなりそうですし、又法学部のカリキュラムも大きく変わり、一年次から専門教育も始まりそうです。教養部改革は、東北大学全体の平成五年度概算要求の最重点項目として提出すべく目下急ピッチで立案中です。腰が重いので定評のある法学部自体の改革も、真剣に検討され出しまし

た。大学の学問研究・教育の本道をはずれない進路を定めることを願いつつ、努力したいと思っています。ご支援下さい。

昨年は、川内移転以来最大とも言える建築上の変化もありました。法学部研究棟の東側（記念講堂寄り）空地に六階建の新棟が建

偶 感

東北大学名誉教授

莊子邦雄



佐々木尚介同窓会事務局長から何度となく執筆の依頼を受け、まだ「思い出」を書く年齢でもあるまいという念が先に立ってお断わりし続けてきたが、とうとう断わり切れずに執筆することとなった。

わたくしは、昭和五十九年定年退官約二年半前に、当時の札幌商科大学（現札幌学院大学）から、昭和五十九年創設予定の法学部の

ち、一〜四階を文学部日本語学科が使い、五・六階を法学部の研究室・図書分室などに充てています。旧棟とは五階のみが接続して広くなりましたが、その分空間・緑が少なくなりました。思い複雑なものがあります。（五月十日記）

学部長に就任して欲しいという話を受け、三回目に学長に対して正式にお断わりの手紙を出したところ、結局、延六回の就任依頼を受け、遂に断わり切れず、定年退官直後の四月二日に法学部長となり、それから学長の任に就き、昨年四月一日、自由の身となって仙台上に落ち着き、現在に至っております。顧みると、七年間の経験は、わたくしにとり誠に貴重であり、特に数多くの友人知己を得たことを嬉しく思っております。

今年四月十五日、定年退官後八

年ぶりに、新旧学部長交代および新任教官赴任に際しての慰労・歓迎の宴に出席し、さまざまな思いを抱いたことであつた。最も強い印象を受けたのは、出席した教授および助教授二十七・八名のうちで初対面の教官を約半数近くも数え、わずか八年の間における変貌の激しさを眼のあたりに実感したということであつた。教授会構成員三十二名のなかに、三十歳台および四十歳台の教官が半数を超えるという現状を思うとき、限りない清新さを感じると共に、わたくしが東北大学に赴任した当時の教官が、今年定年退官の宮田教授を最後に誰一人として存在しなくなったことを思い、わたくし自身が馬齢を重ねたと痛感せざるを得ないところでです。

当時を思い、うたた感無量です。その時から数えて、はや三十年が過ぎ去りました。数多くの思い出をわずかの紙数でどれだけ正確に描きだせるか、そういう思いを抱くと、「思い出」を記すことに対して気が重くなります。「すべての過ぎ去り行くものは、ただ形象なるのみ」という句を思い出します。

わたくしは、現在、月に十二日は一滴も酒を飲まないということを実行しております。札幌学院大学七周年単身赴任の賜物だと言ってよいだろうと思えます。札幌で晩酌をひとり傾けているときに、フト、一週間に一回、酒を断つて見ようかと考えて実行したのがキッカケで、一週間に二回やめたりしているうちに、月に十日以上飲まなくても平気になり、五・六年前から、いわば自分自身に対する責務として十日は必ず飲まないようにしてきたのであります。

現在でも、飲まない日は誠に味気ない思いを抱き、苦痛ですが、しかし、飲む日は誠に楽しく、飲まない日の苦痛を飲みくだし、痛快

です。もっとも、家で飲むときは二合を超えることはない。というのは、学部長時代に培われた定期身体検査受診という「良習」のお陰で、学部長を終えた五十五歳の時に人間ドックにはいる気持ちをおこし、「糖尿病」という宣告を受け、翌年から「糖尿病」を克服したものの「境界型」を続けているためです。「糖尿病」でない以上、月に十二日も飲まない日を設定するのは全く必要ないわけですが、モノを書ける日々を少しでも延長させることに役立てばと考え、馬鹿な日を設けています。

わたくしは、現役時代に興至れば李白の詩をよく吟じました。

『山中ニ幽人ト對酌ス』

「兩人對酌スレバ山花開ク。

一杯一杯又一杯。

我酔イテ眠ラント欲ス。

君シバラク去レ。

明朝意有ラバ琴ヲ抱キテ來レ」

最近、杜甫の七言律詩『曲江』

のなかの一節、

「酒債ハ尋常、行ク処ニ有リ。

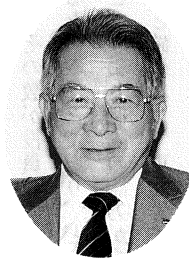
人生七十 古來稀ナリ」

を吟ずることがある。李白（七六

二年、六十一歳没）、杜甫（七七〇年、五十八歳没）、それぞれに趣のある「悠々たる酒」だと思う。

私の誇り。東北大

庄司 昊 明



私は一九二六年（大正15年）生まれ、一九五〇年（昭和25年）に東京に行くまでずっと仙台で生活した生粋の仙台人である。

その最後の仕上げが東北大学部。この肩書が一生ついて回る。

仙台一中・旧制二高・東北大という学歴は、昔は仙台のエリートコースと言われた。しかし、ある人から言わせるとイージーコースとも言われる。一中・二高の入学の難しさから言うと、大学はフリーパスみたいだからだ。しかし、我われの時代は東大、京大といえどもフリーパスに近く、ましてや

節酒をしながらも、李白・杜甫の悠々たる酒にあやかりたいと念じている。一九九二・四・二九

早・慶などの風下に立つなど考えうべくもなかった時代である。

従って、私は物心ついた頃から

大学は東北大と決めていた。頭髪はリーゼントスタイル、襟にJのマークの学生服を着た大学生が、和服の艶やかな女性と喫茶店で静かに語り合っている情景など、子供の眼には素晴らしい大人の世界と映り、憧れたものであった。また、私の二高最後の年には、法学部の先輩に佐々木和夫（元王子製紙）、江橋英五郎（弁護士）、垂井一郎（元日銀）などがおり、極めて身近な尊敬の的であった。極めつきは東北大野球部。昭和二十一年復活した評定河原での対仙鉄戦、あるいは三田クラブなどの戦いを眼のあたりに見た私は、この

人たちと一日も早く野球をしたいと四月になるのが待ち遠しかった。法学部入学イコール野球部入学であった。法学部の仲間も全国各地から集まった。旧制二高と同じく四分の一宮城県、四分の一東北、四分の一東京、四分の一全国と、おおよそ同じ率と考えてよいと思う。野球部も同じく地元は私と二・三人のみで、全国各校の名手が集まった。終戦直後ならではある。

従って強力な野球部で、今日に至るまで空前絶後のチームということになっている。この中で旧制佐賀高から来たキャプテン木下藤次郎（昭22経・東北電力・ユアテック）のみ私ども仲間の長男として故郷仙台に残り、名士となったが、あとの仲間は全部東京に出て各界で大活躍をしている。

私の三年間、野球部長は清宮憲法先生、中村（重）金融先生と法学部の学生に単位をくれる先生が二人も替わり、大変有り難かった。別にお情けの合格単位を頂いたとは思わないが、試験の時何となく不合格にはしないであろうとの安

心感を持たせてもらった。三年間に20単位。しかも時代のせいで単位の取り易い他大学教授の集中講義などあり、卒業の単位取得には全く苦労しないで済んだ。

こんな呑気な学生には勿体ないような豪華絢爛の教授先生であつた。

清宮憲法、中川民法、津曲民法、木村刑法、斎藤民法、小町谷商法、勝本民法、柳瀬行政法、小谷国際法、石崎社会法など数えきれない碩学、大家がおられ、木村・勝本先生など何年間か東大、京大の懇請を受け、特別講義にゆかれたのが私どもの自慢の種となっている。かくして長かったのか、短かったのか、三年の月日は経ち、社会への入門である就職のシーズンを迎える。

昭和二十四年秋は特に就職難。

それでも十月過ぎからポツポツ同僚の就職が決定してゆく。そして三月までの四・五か月は一生で最後の学生生活という最高の期間であつた。思えば昭和二十二年入学から三年経った昭和二十五年とでは、敗戦の傷痕回復の度合いが極

めて顕著であり、確実にやって来た平和への感触と、明日への希望が全身を抱擁してくれ、若者だった私どもにはそれが大きな躍動感、感動感となっていた。

東京に就職し無我夢中で社会に没入した。一番驚いたのは仙台時代考えられもしなかった私大（早慶など）のレベルの高さである。学力のレベルというのではなく、

学生ライフの幅である。官学の持つていない良さを彼らは自然に身につけていたのには参った。それから民間会社には学閥というのがないのを知った。官界でもそうであるのが先輩がゆけば自然と後輩もゆき、その数が役員数にも表れてくるということであり、この大学というより個人の能力が総てであると確信した。東北大法学生の卒業生の少ないのは、その一人当たりの贅沢な授業とは裏腹に、マンモス大学と比し社会におけるパワー不足につながることも体験した。

さて、法学部同窓会東京支部には、安西浩（故人・東京ガス）という大物先輩があり、会の充実に

は何ともはや口で表せないほど、お世話になった。ケタ外れに東北大法学部を愛した人と言えよう。安西さんのあと、やはり日本経済界でこの人をおいて人なしと言われる石原さんが引き継いでくれた。我われには大変光栄なことだ。著名な先輩を持つことは後輩冥利に尽きるものだ。

最近後輩の結婚式に招かれるが、集まる先輩・友人はほとんど東大・早慶の連中である。その時のスピーチで私はいつも新婦に向かつて言う。

「奥さんになられた〇〇子さん。

仙台にしょっちゅうきてください。ご亭主の学んだ東北大のキャンパスを見たら、世の中で流

行っている東北大、早慶の三つに合格したら東北大から辞退するなどという馬鹿げたことはなくなるでしょう」

と。

さて、私の畏友である西澤潤一兄が学長になられた。西澤学長は一大学の人ではなく日本全体の至宝である。しかしそれとは別に、

西澤学長によって東北大がローカル大学かという風潮に歯止めをかけ、大学の地位・評価・人氣が飛躍的に上がることを心から願っている。何故なら私には一生東北大出身の肩書がついて回るからである。（昭25年卒・東京支部会事務局長・リネットク代表取締役社長）

青春の一ページ

高橋 良子



時。仲間の一人が、新型のセミバイクで登校したことが話題にのぼりました。

ある初夏の昼休み、例によって七・八人で芝生でダべっている

昭和三十年後半、原付自転車が庶民の乗物の中では盛んで、ス

クーターやオートバイは珍しい方でした。その頃、スクーターとオートバイのハーフの様な手軽に乗れるセミバイクが売り出され、ニューモデルでした。早速、試乗希望者が名乗り出て、試乗会と相成ったのですが……。

テスターがセミバイクにまたがり、オーナーが「ここをこう押して、ここを回すと……。」と言いなから操作した途端、セミバイクはトットトットと走り始めました。

あわてたテスターが「おい、走っちゃったよ。オレ、どうすればいいんだよ。」と叫びつつ、芝生を囲む道を走っています。オーナーもあわてて追いますが、追いつくはずがありません。芝生を一周したセミバイクにオーナーが併走しながら、「そこを回して」、テスターが「そこってどこだよ」。また一周して、オーナーが「左のハンドルを回せ」、テスターは「どっちの方に……?」。と落語まがいの会話。

何周かして、やっと止め方が分かり、停止しました。その間、オーナーが息を切らしてセミバイクと

併走する様や、うろたえてセミバイクに乗っているテスターの様子を、残る五・六人の仲間が勿論のこと、芝生にたむろしていた他の学生たちも笑いこぼして見ていました。

止め方も聞かずに乗ってしまう無謀さ、止め方を教えずに乗せてしまう鷹揚さ、一緒にいて、それに気付かぬ私たちの間抜けさ加減

法学部第二研究棟の竣工

吉田 正志

本年三月に竣工いたしました法学部第二研究棟について、簡単にご案内いたします。

一昨年来、これまでの法学部研究棟（以下、第一研究棟と呼びます）といわゆる中善並木通りとの間の場所に、文学部・法学部合同研究棟の建設が進められました。この三月によりやく完成いたしました。六階建ての棟で、一階から四階までは文学部の日本語学科が使用し、五・六階を法学部が

に呆れながら、今にして思えば、青春ならではの愚行だったのだと懐かしく思い起こします。

私たちの年代は、学園紛争の真ただ中でした。真剣に学園の将来を憂い、集会やデモにも度々参加しました。そんな中で、ある日の出来事です。（昭41年卒・旧小宮山・ピアノ教師）

使用いたします。私たちはこの棟を法学部第二研究棟（以下、第二研究棟と略称いたします）と呼ぶことにいたしました。

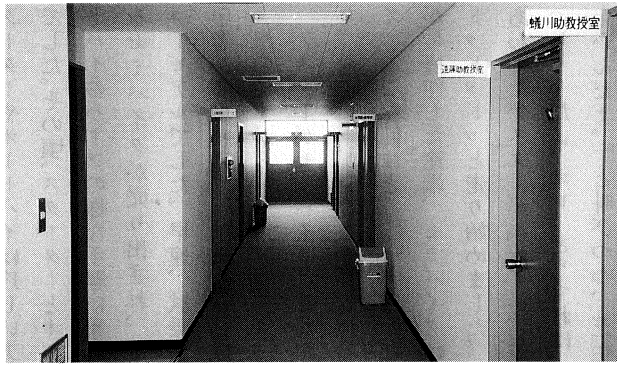
片平時代の法学部の施設は、それなりの広さを持ちながらも何カ所かに分散しておりましたが、川内移転にもないそれが第一研究棟に集中され使用上は便利になりました。しかし、広さの点から申しますと片平時代より狭くなった所もあり、とくに教官の充実が進



むにつれて顕著になった研究室の不足と、受入れ雑誌等の整備・充実の進行に伴う図書室スペースの狭隘化とに、相当以前より悩まされてきました。そんなときに、文学部と合同ならば法学部施設の拡充ができるとの話がかちあがりました。ただし、その場合には建築場所として第一研究棟と中善並木通りとの間が望ましいとの条件がありました。法学部といたしましては、この場所については他の使用方法を考えておりました。また

合同研究棟のもつ問題点など、いろいろ考慮を加えましたが、最終的に合同研究棟の建設に同意し、今日の竣工に至った次第です。

以下、第二研究棟の内部をご紹介します。第二研究棟の北側はすべて書庫として使用されます。ここには電動式集密書架が設置され、主として国連関係資料とアメリカ合衆国の判例集などが集中して配架されます。これまで第一研究棟内のいくつかの部屋に分散配置されていた資料が、一か所に集中



されましたので、大いに利用しやすくなったと思います。五階の南側には、この書庫の資料を閲覧するため

の部屋が設けられましたので、外来の方の資料

利用にも便宜か

と思えます。五階のもう一つの

目玉は、パーソナル・コンピュータ

ターを配置する部屋を南側に設けたことです。近年、判例・法令や新聞記事の検索にパソコンの利用

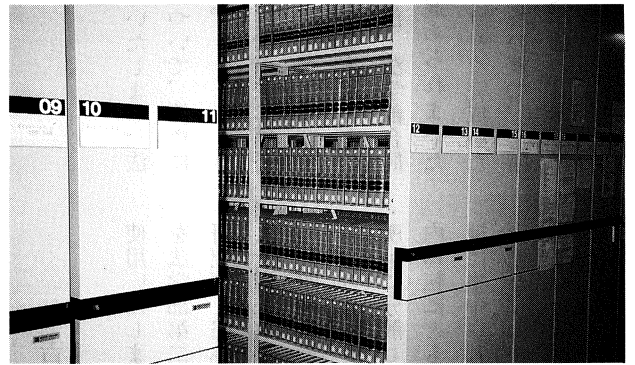
が増大しておりますが、このような傾向に対応した教育を行うための

スペースを確保いたしました。なお、五階の第一研究棟側の床

を少し張り出して渡り廊下的にすることによって、第一研究棟と第二研究棟との間の移動が可能なようにいたしました。

六階の南側は、主として教官研究室として使われますが、北側

には法政資料調査室の所蔵する資料を配架・展示するスペースを設けました。この資料の中には松川事件で有名な「諏訪メモ」や高柳真三名誉教授寄贈の古文書類、また廣中俊雄名誉教授寄贈の資料その他が含まれます。貴重な資料は展示ケースに入れることによつて、外部の方にも容易にご覧いただけるようにできたと考えております。



以上が第二研究棟の概略です。なお、合同研究棟入口には「法学部第二研究棟」の表札が掲げられています。この文字は、第二研究棟竣工と時を同じくして退官された宮田光雄名誉教授に揮毫していただいたものであることを最後に申し添えます。(昭45年卒・東

北大学法学部教授)

全学同窓会

石原俊氏講演

東海林 恒 英

平成四年は東北大学創立八十五周年にあたることから、例年より多くの参加を目指して、六月二十日(土)市内仙台ホテルにおいて記念の講演会と懇親会が盛大に举行される予定となっています。この会報が皆様の手元に届くころにはすでに実施された後となると思われませんが、この日の講演会において、法学部の先輩である石原俊氏(昭12年卒、同窓会副会長・東京支部会会長・日産自動車㈱取締役会長)が講演される予定となっています。会報の編集の關係で本号では報告が間に合わないのが残念ですが、同窓の皆様にご報告する次第です。

(昭33卒、宮城支部事務局長・仙台市教育長)

宮田光雄先生

最終講義

ことし三月に停年退官されて、名誉教授となられた元同窓会長の宮田光雄先生の最終講義が、一月二十五日、法学部二番教室で行われた。

一貫して平和とデモクラシーについて研究してこられた等の紹介に続いて教壇に上がった先生は、「ヨーロッパ思想史研究四十年」と題してご自分の研究を振り返られ、自由な学風の東北大学に

赴任して研究が大きく進んだことなどについて、淡々とした中に説得力のある普段の講義と同様の口調で熱心に語られた。

いつも講義で使われた教室であるため、学生のほか名誉教授や現教官、卒業生までも詰め掛けた教室は満員で座ることの出来ない者も大勢見られたほどであった。

足りない時間を気にされながらの講義の後、教え子からの大きな花束を手に、いつまでも続く拍手のなか教室を後にされた。

(取材・記事 事務局長)

同窓会総会報告

佐々木 尚 介

平成三年度の同窓会総会は十一月八日午後六時から仙台市のホテルリッチ仙台蔵王西の間において盛大に開催された。

司会役は斎藤隆志氏(昭50年卒、宮城支部理事・東北電力(働勤務)が務めた。議事に先立ち、同窓会長・小田中聰樹法学部長のご挨拶があり、その中で、商法ご担当の

処理関連設備等に使用する予定であること、学生の入学定員は二百五十名となっていること、司法試験の合格者は七名であったこと、

法学部を含めて母校は大学改革の嵐の中にあり、カリキュラムや研究体制の再検討という大きな波を被って懸命に努力をしているが、同窓の皆様にも母校発展のためのお力添えを頂きたいとお話しがあつた。

続いて宮城支部長・津軽芳三郎宮城県美術館長からの歓迎のご挨拶と東京支部事務局長の小幡常夫氏から東京支部の近況紹介を交えてのご祝辞があり、恒例により同窓会長の小田中先生を議長に選出して議事に入った。

議題としては、平成二年度決算について事務局長からの内容説明の後、監事の上田宏氏からの監査報告がなされ満場一致でこれを承認し、会務報告としては、本年度の会報の発行、会議の開催状況、会員の状況、名簿編集の進行状況、全学同窓会等についての報告が事務局長よりなされた。

仙台市における総会は宮城支部

との共催で行われる関係で、ここで宮城支部の業務報告がなされて全ての子定は終了した。

一息入れてからの懇親会では、出席者のうち一番の先輩である佐々木重之助氏の乾杯の発声で和やかに始まり、同窓生でもあり来賓の阿部純二教授、同じく森田寛二教授をはじめ、社会法担当の岩村正彦助教授、経済法担当の白石忠志助教授、比較外国憲法担当の蟻川恒正助教授、アジア政治外交論担当の李鐘元助教授にそれぞれ自己紹介を交えたスピーチをして頂き、会場の雰囲気は一気に盛り上がった。

続いて遠路はるばる参加した同窓生からのスピーチに移り、それぞれ自己紹介として、居住地や勤務先の紹介があつたが、なかでも熊谷正弘氏(昭35年卒、島根県商工労働部次長)は島根県知事の代理のごとく、県の状況、同県内同窓生の状況を含めて県のPRを上手にされて、同窓の皆様を来県を歓迎するとのお話が印象的であつた。最若年同窓生の代表として東京都在任の西健一郎君(平3年卒、

東洋インキ製造(株勤務)のスピーチでお開きとなり、吉村英三氏(昭29年卒、仙台地検検事正)の発声で参加者の健勝と発展を祈念して散会し、一斉にそれぞれの二次会へと向かった。

今回は母校から大勢の先生方のご参加もあり、各年代ごとに平均的な参加を得て、特に平成の卒業生や遠隔地からの参加も多く大変嬉しいことであった。同窓会総会を口実として、グループごとの二次会なども大いに計画されることを期待している。

(昭32年卒・同窓会事務局長)

支部だより

東京支部会

坪井賢司

平成三年度の支部総会は、十一月十八日、いままでの新橋第一ホテルから学士会館に場所を変えて行われました。来賓として仙台から太田前会長・青井教授・阿部教授・小山教授・佐々木事務局長の五氏をお迎えし、在京地区会員参

加者百三十余名と共に盛大に開催することができました。

第一部の総会は、真田興理事(昭22年卒)の司会で進められ、島田秀夫副会長(昭15年卒)による開会の辞のあと、飯塚毅副会長(昭18年卒)が議長を務め、小幡常夫事務局長(昭14年卒)の会務一般報告・伊藤一郎理事(昭28年卒)の会計報告・中村市助理事(昭22年卒)の監査報告、事務局体制の変更を承認した後、三木与志夫副会長(昭21年卒)による閉会の辞をもって無事終了しました。

なお、長年東京支部会の事務局長を務めてこられた小幡常夫氏に代わり、新しく事務局長に庄司昊明氏(昭25年卒)、同次長にわたくし坪井と鎌田篤造氏(昭33年卒)を選任し、佐藤正之氏(昭32年卒)は次長留任と決まりましたことをご報告致します。新しい事務局体制による支部の運営につき皆様のご協力をお願いします。この総会のご来賓を代表されて、太田前会長から母校の現況などについてご挨拶をいただき、続

いて特別講演として石原俊会長(昭12年卒)にお話をいただきました。前経済同友会代表幹事という財界人としての立場から話された内容は、時宜をえて示唆に富み、特に経営者のあるべき姿について

のご所信は参加者に感銘を与えましたが、同時に、趣向を変えた三十数年来の趣味であるという太平洋上でのカジキマグロに懸ける豪快な釣り体験談は、一服の清涼剤として会を和ませてくれました。

二部の懇親会は、佐藤正之理事の司会で進められ、村教三氏(昭2年卒)の元気のよい乾杯の音頭にはじまり、有賀美智子女史(昭7年卒)、垂井一郎氏(昭23年卒)のスピーチに耳を傾けながら盛り上がりを見せ、久しぶりに会う同窓生の歓談の輪があちこちにできていたり、また、きれいだころのサーブスが花を添えてくれた楽しいひとときでもありました。今総会が大変うまく運営され、盛り上がりを見せましたのも、小幡前事務局長のお力に与かるところが大であったことを付記しておきます。今年も新学士諸君が大勢

東京圏に就職されましたが、心から歓迎します。そして積極的に入会して活躍されることを期待して止みません。

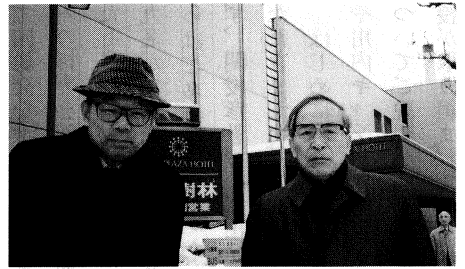
(昭31年卒・東京支部会事務局長)

北海道支部

齊藤哲也

平成四年度の第一回理事会が四月十四日に開催され、本年度の事業計画が固まった。

これによれば、(一)平成三年度に支部会員全員にお願いした支部運営寄付金の総額が、七十三万八千五百円(一口五千円で延べ七十八名から百四十七口)になったこと。(二)平成四年度の年次総会は、平成五年一月二十二日(金)を予定すること。(三)夏のビール会は、平成三年度と同様七月上旬中旬に行うこと。(四)親睦ゴルフ会を、六月、九月に各一回行うこと。(五)本年一月に作成した支部会員名簿は、寄付を得られなかった会員にも再度お願いを兼ねて送付することなどが決定した。



左・阿部教授、右・山島支部長

これに先立ち本年一月二十四日（金）には、雪降りしぎる中、年次総会が、北海道厚生年金会館において開催され、本部から阿部純二常任理事（東北大学法学部教授）が臨席された。当日は、最年長の高橋正之会員（昭13年卒）をはじめ総勢四十六名の会員が参集し、夜の更けるまで懇親の宴が繰り広げられた。北海道、特に札幌市に転入出する同窓会員は大変多く、今回はごく最近着任された磯部喬会員（昭28年卒・札幌高等裁判所判事）、片野宏会員（昭28年卒・サッポロビール常務）、佐藤道夫会員（昭30年卒・札幌高等検察庁検事長）などの新顔が目立ち、逆

に宮下茂会員（昭40年卒・住友銀行札幌支店長）などの都市銀行組が全員離道され、新旧入れ替わりの激しさが伺われた。

このような状況下、事務局のデスクワークも結構増して来たので、本部のパソコンとまでは及ばずとも、一寸したワークステーションを持ちたいと思っている。支部運営のため協力下さっている会員への最大のサービスとは何かが頭から離れない昨今ではある。

（昭31年卒・北海道支部事務局長）

岩手支部

伊藤 純

「春まだ浅く 月若き

生命の森の 夜の香に……」

朝一番に石川啄木の詩「春まだ浅く」（古賀政男作曲）が市内全域に響く盛岡市役所には、法学部同窓生が五名勤務しております。

岩手支部では、今までの支部日よりとは少々趣を異に、盛岡市役所支部の様子をお伝えしたいと思います。

盛岡市は、母校のある仙台市か

ら北に二百キロ、東北新幹線の北の発着駅であり、また、北東北の観光拠点である盛岡駅を起点として、岩手県の政治、経済、産業の中心となる県庁所在都市として発展しております。

また、この四月には、長年の懸案でありました隣接の都南村との合併を実現させ、人口二八万人の都市として更に大きな飛躍が期待されております……と、まずは決まり文句の市政紹介になりましたことをお許しください。

同窓生五名は、昭和四四年卒を筆頭として、五五、五六、五七、六三卒と、まだまだ若い……というよりは庁内では中堅としての年齢層が中心ですが、それだけにその才気と行動力を遺憾なく発揮し、所属や業務内容は異なりますものの、それぞれの部署で存分に活躍をしております。

特に昭和四四年卒のRさんは、我々五人の総領として、当学部出身者の範となり、庁内でも常に話題の人物であります。ゆくゆくは市の三役にも、との期待も非常に大きいのですが、「さ」の付くも

の（飲み物です）に身も心もすべてを捧げかねない、との風評も同時に聞かれ、その人となりのおおらかさが伺い知れることとなっております。

他の同窓生の紹介は、紙面の都合で省かせていただきますが、皆Rさんその旗印として、意気に溢れる毎日を送っております。

学部生同窓だけの集まりは特に設けておりませんが、岩手支部総会の際にはささやかな（とはいえ、極めて長時間の）集まりを催し、また、定期的に行われる他学部の同窓生との「東北大学同窓会盛岡市役所支部」の際には、一番町や稲荷小路で鍛えた自慢のどを潤したりしております。

仙台市からは新幹線で、わずか一時間。「杜と水の都」として、仙台市に勝るとも劣らぬ四季の風光に満ちあふれた自慢の当市です。是非とも皆様おいでください。

（昭55年卒・盛岡市役所）

福島支部

佐藤 宗光

当支部の会員数は、平成三年十一月現在百七十六名となっておりますが、職種別にみますと福島県職員が約半数と最も多く、次いで法曹界、実業界、学界等各分野にわたり中核的な存在として活躍されています。

当支部の総会は、このように異なった分野の方々に直かに接することのできる機会として、非常に意義深いものと会員の皆様から楽しみにしていただいております。

さて、平成三年度も、第十二回総会を十一月八日福島市内の杉妻会館において開催いたしました。当日は会員三十九名が参加し、同窓会本部からはご多忙中にもかかわらず、関俊彦教授のご出席をいただきました。

はじめに関教授から法学部や川内キャンパスの現況等についてご説明があり、特に教授が取り組まれている英語の

みによるゼミナールの試みの部分では、本学のレベルの高さと、教授の並々ならぬご意欲に、会員一同深く感じ入った次第です。

引き続き懇親会は、参加者中最先輩である大谷明夫先生（昭25年卒・三春町民図書館長）の乾杯の発声で始まり、会場は和気あいあいのにぎやかさに包まれました。宴もたけなわの頃、新たな道に



進まれる会員のご紹介と会員の皆様からの温かい激励があり、最後は武義弘さん（昭54年卒・福島県人事課）のかけ声のもと、恒例の学生歌を全員で合唱し、なごりを惜しみつつ散会となりました。

最後までご一緒してくださいました関教授に厚く御礼を申し上げますとともに、今後とも同窓会本部をはじめ、皆様方のご協力とご指導をいただきながら、当支部の円滑な運営を図っていく所存でございます。

（昭26年卒・福島支部長）

職場だより

青森県の

礎となる卒業生

角 俊行

桜のつぼみが芽を吹くころ、我が同窓会は例年よりも多く四名の仲間をむかえることができた。

我が青森県庁東北大学法学部同窓会は、会長の古内明朗人事委員会委員長（昭37年卒）を筆頭に総勢二十九名と会合に適当な人員と

いうこともあり、年に一〜二回は定期的に参集している。

平成四年度も新人の歓迎会と塚原忠地方労働委員会事務局長（昭31年卒）の退任に伴う送別会を兼ねて四月早々の会合と相成った。

会社为例えれば専務・常務取締役格の佐々木透企画部長（昭38年卒）や成田正光公営企業局長（昭40年卒）をはじめとして、大学を卒業したばかりの新人まで、上下や部局の垣根を超えての語り合いは、誠に貴重なものと考えている。大学時代片平丁や川内内で過ごした思い出や仕事上のアドバイスなど和気あいあいとした中で散会となった。

地方公務員といえば、安い賃金、企業的感觉の欠如、モラルの低さなど惨たんたるイメージで巷間取りざたされたこともあるが、我ら同窓会諸氏に共通した思いは、郷土の発展のために全力を尽くすことではないかと思う次第である。地方の時代といわれて久しくなる中で、本県は、今後、全国的にみても急激な高齢化社会を迎えることとなり、また人口減少、と



い。

仙台という街と、素晴らしい恩師や友人に囲まれて育った思い出を糧に頑張っていると、この場を借りて報告申し上げるとともに、若く美しい青森県、課題の多い青森県、やりがいのある青森県、現在在学中の学生諸君も就職先としては是非考えていただきたいものとPRする次第である。(昭56年卒・青森県企画部調整課主査)

農林中央金庫

菊池 純 一

りわけ若年層の人口流失といった課題を抱えているが、これら課題の克服のため人口定住施策を強く推進しているほか、過去の後進県のイメージに別れを告げつつ、豊かな生活環境と文化の香り高い県土の構築を目指してテクノポリスほか諸プロジェクトを強力に推進している。

全員の紹介をすることはできなかったが、我が同窓会メンバー諸氏は、その中心となって多方面で活躍中であることは申すまでもな

農林中金というと、仙台では戦災にも焼け残ったという南町通の堅ろうな建物(といっても高層化著しい昨今の仙台では三階建ての建物はビルの谷間に埋もれてしまっているが)地方在住の方々の場合は各県庁所在地に展開する支店の店先で毎月七・八日を「花の日」とかけて開催する「花の市」で存じの方もいらっしゃるのではないだろうか。

はじめに農林中金の業容を簡単にご紹介したい。農林中金は農林

水産業のメインバンクたるべく特別法に基づき設立された特殊金融機関であるが、その業務内容は農林水産業の変遷や金融自由化の流れに連れて多様化している。現在では、貸出は農林水産業を核にそれに関連する産業にも広く及び、また増大する農協貯金の運用ニーズをベースに内外金融市場には大口の機関投資家として参加している。また金利自由化・金融自由化に向けて、総額63兆円に及ぶ農協・漁協信用事業のカジ取り役も担っている。

こうした広範にわたる業務を総勢三千人の少世帯で切り盛りする農林中金において、東北大学法学部出身者は現在四十八名。このうち昭和六十年以降の入庫者は十八名と、近年の業務拡大に伴う採用増を反映して若手の層が厚くなってきた。

同窓会活動は、残念ながら行つてはおらず、同窓生のつながりは専ら所属部署や担当業務を通じた個人的なものとなっている。農林中金は農林水産業のメインバンクとして概ね各県に一店の割合で支

店を展開しており、地方勤務となる者も少なくないことが一因であろうか。

法学部出身者の近況を紹介させていただくと、紙面の関係もあろうごく一部の方々とどまらるが、まず国際部門担当常務理事の児玉晃(昭30年卒)。今や日本の農林水産業も国内のみに留まってはならず、海外との提携や進出も盛ん。こうした取引先からのニーズを汲んで農林中金も近年国際部門に注力しており、常務も自ら世界中を駆け巡っている。農林水産業に関連する企業への融資(現在約八兆円の残高)を総括するのが営業統括部長の岡田晴彦(昭37年卒)。農林中金の業務遂行状況に内部から目を光らせる検査部長の目黒紀之(昭38年卒)。職員百八十名の大坂支店で副支店長・支配人として活躍中の遊佐皓(昭39年卒)。この他昭和四十年以降入庫の面々も、金融制度改革をにらんだ企画立案や営業の第一線で活躍中である。(昭57年卒・農林中央金庫国際金融部)

同期会だより

二七入学・三一年

卒業の同期会から

佐野 寿七

我々の同期会は、昭和二十七年入学時、昭和三十一年卒業時に同期であった者がメンバーになってい。つまり昭和二十七年三神峯の第一教養部に入学して、昭和三十一年片平丁の本部を卒業したマトモ組に、学部編入者や留年卒延者などシューサイ組を加えた一八八人である。なぜ、シューサイ組かという、ほとんどの者が、弁護士とか一流会社への就職者であったりするからだ。

マトモ組のなかにも在学中に司法試験を通った超秀才がごろごろいた。が、私のように教授の顔を見ると、途端に逃げだすようなバカ学生も多かった。ように思う。先生は当時の日本法学界最高の教授が、きら星のごとく教壇にたっていた。商法の小町谷操三、刑法の木村亀二、民法の中川善之助

憲法の清宮四郎、行政法の柳瀬良幹、そして津曲さん、石崎さん、伊沢さん、高柳の親父さんなどなど。だが、みんな亡くなられて今はいない。

教授が偉かったから、というだけでなく、同期会メンバーに、司法試験経由法曹関係に就いた者二〇人。大学教職、中央地方の役人など官庁関係にいった者併せて三八人。つまり、メンバーの約三分の一は、東北大法学部の保守本流に乗ったというわけだ。これ以外の大半の者は、一流から三流四流の一般企業に、頭脳流出していった。

昭和三十一年のあの頃は、本当にひどい就職難時代だった。再軍備反対闘争はあったが、コッペンが主流で、ほかにはろくな物のなかった仙台だった。「キミは、大学院なんてことを考えないほうがいい。成績が悪すぎるから」と国際私法の折茂教授にいわれて、私は、一転、新聞記者を目指した。が、見事にふられ、就職浪人になって、人生最初の挫折を味わった。諸兄よ

りも早く頭が禿げたのは、なにを隠そう、その時の後遺症なのだ。難関を掻い潜って、一流企業に就職した者は、老眼鏡をかけて、頭を真っ白にしてしまった。仕方なく三流企業に就職した者は、順調に役職をこなして、でっぴりした体躯になっている。誰も彼も、三五年経って、ひどい様変わりだ。



とにかく、そういう様変わりした同期生が、北海道から、九州から、なんと五〇人も集まった。ゲストは、加藤永一先生だったが、同期生と比べて意外に若く、「あいつ、なんて名前だったけ？」なんて幹事にきいてしまったくらいだ。

平成三年八月二四日の夜、松島ホテル一の坊は、私たち五〇人の青春で、危うく火が点きそうな熱気になった。けれど、在仙の幹事諸兄の、これ以上考えられないくらい綿密な心配りの故に、美人女将のサービスが燃え上がった程度で、大事には至らなかった。幸いなことだった。

死亡してこの同期会に参加できなかった者、一〇人。人生は有為転変、うまくいく時もあれば、暗い挫折もある。だが、次にまた会う日まで、健康だけには、各自責任をもって注意しようと固く申し合わせた。

参加同期生全員の感謝を幹事の諸兄に捧げる。

(昭和三十一年卒・よみうりテレビ放送(株)プロデューサー)